

# 遠隔授業における学生参画型授業方略の評価

瀬川 良明

北海道教育大学 教育実践総合センター

## 1. 同期双方向型の遠隔授業の特性

テレビ会議を利用した同期双方向型の遠隔授業では、教室間での情報量が映像的にも大きく制限されるため、対面授業のようにお互いの状況をリアルタイムに把握することが難しい。したがって、表情が読み取れず聞き手の反応が分かりにくく、対面授業ではあたりまえのように実現できることが遠隔授業では難しい。いわゆる臨場感を共有することが難しいという問題である。

この問題は、映像の入出力、伝送帯域などテレビ会議システムの性能に大きく依存するが、ハード面の改善だけで解決できるわけではない。テレビ会議における非対称な双方向性を補完していく利用者によるソフト面での工夫が不可欠である。

## 2. 教授スキルとしてのプレゼンテーション

総合的な学習の時間などで児童生徒がパソコンを使いプレゼンテーションすることは当たり前になった。教師にとっても I C T (Information Communication Technology) を活用したプレゼンテーションは必須の教授スキルである。しかし、昨年の調査では、受講生の8割弱がパソコンによるプレゼンテーションは未経験であった。情報教育の過渡期という要因に加え、教職必修単位である「情報機器操作」で、プレゼンテーション実習が行われていないことによる。

国語の教科書にポスター発表が登場するなど、学校教育におけるコミュニケーションスキルが改めて注目されている。しかし、プレゼンテーションスキルを育成するカリキュラムが十分機能しているわけではない。言語、非言語、メディア利用技術で構成されるプレゼンテーションが未来の教師に求められる所以である。

## 3. 遠隔授業の授業方略

筆者は北海道教育大学で、学校図書館司書教諭講習科目「情報メディアの活用」を遠隔授業として2000年から開講している。講習の趣旨からも、伝統的な黒板とテキストを使った一方通行型の講義形式で、ノートを取り、感想レポートを書くという授業方略では、そのねらいを達成できるはずがない。まして遠隔授業である。

遠隔授業の制約条件下で、一人一人の学生を論議へ積極的に参画させるためには、学生がパソコンを使って演習課題に取り組むといった戦術的なレベルではなく、講習そのものが I C T を駆使する戦略的なレベルでの実践が必要である。その意味で、メディアを介したコミュニケーションスキルを育成する確好の機会である。授業方略として「グループによるプレゼンテーション」と、「キャンパス対抗の相互評価」の2つを採用した。

第1に、学習内容と密接に関連した課題についてグループで調査し、プレゼンテーションすることで、「知っている」という宣言型知識の習得を目指した知識伝達型の講義形式で

はなく、学習活動をとおして「わかる」あるいは「できる」という意味の手続き型知識の習得を意図した。

第2に、テレビ会議システムというメディアを意図的に利用することで動機づけた点である。テレビ会議システムを利用したキャンパス対抗によるプレゼンテーションの相互評価をとおして、対面式の授業形態では見過ごされがちな他者に配慮したコミュニケーション能力の育成を図った。

#### 4. プレゼンテーションの相互評価

指定された課題についてキャンパス代表を選出し、その発表をキャンパス間で相互評価し、次回に評価結果について発表するという展開である。ちなみに、昨年度の課題は、「卒業した学校の図書館について」、「大学生の読書に関する実態について」等である。

評価は、5段階で評価する評価項目と自由記述を組み合わせたものである。

評価項目（5段階評価）	自由記述
項目1：説明は筋がとおり要点を把握できる	・特に良かった点を誉める ・改善すべき点を具体的に示す ・私ならこうしたい という観点で記述する
項目2：ことばは正確で分かりやすい	
項目3：資料を分かりやすくまとめている	
項目4：メディア利用に工夫があり理解しやすい	
項目5：伝えたいという意欲が感じられる	

事前学習では、プレゼンテーションの基本として、スライドの設計制作、スピーチの基本、評価の観点等に加え、アウトライン、ハンドノート、ハンズアウト、リハーサルなど無視されがちな項目についても説明した。事後学習では、発表者のレポートを基に若干の討議を行った。

#### 5. 授業方略の評価

テレビ会議システムを利用した遠隔授業は受講生にとって初めての体験である。またプレゼンテーションの経験がある学生にとっても相互評価は初めての経験である。受講生のレポートから、「プレゼンテーションの相互評価」に対する評価を集約した。

- ・メッセージを相手にどう伝え、相手の反応にどう対応していくかという、コミュニケーションの基本を改めて問い直すことができた。
- ・他校のプレゼンテーションを評価することが、自分達のプレゼンテーション作成の参考になった。レベルに応じたプレゼンテーションができるようになった。
- ・確実にメッセージを伝達するためには、相手を想定した分かりやすい資料のまとめ方が重要であるが、それ以上に要点を押さえた説明の仕方が重要であることが分かった。
- ・提示資料と説明の仕方には密接な関係があり、その組み合わせの仕方が要点の把握、考察の理解に影響を与えることが理解できた。

また、本講義は4年生を優先受講させていることから、直ちにゼミや卒論発表に適用できる点が評価されている。なお、対面形式ではあるが、プレゼンテーションの相互評価を10年目経験者研修にも適用している。「ある程度は知っていたつもりだったが、中途半端であった。教科指導に自信が持てるようになった。」という感想のように、現職教員からも評価されている。